

5月の安全運転のポイント 平成20年5月号

ドライバーの皆さんのなかには、脇道から自転車が飛び出してきたりヒヤッとしたとか、歩行者がいきなり道路を横断してきたドキッとしたという体験を持つ方も多いでしょう。実際、交通状況にはさまざまな危険が潜んでいます。事故を起こさないようにするためには、交通状況に潜む危険を的確に予測して、それを回避する運転を実践することが大切です。そこで今回は、危険予測運転について考えてみることにしましょう。

よく「みる」

危険を的確に予測するためには、まず周囲をしっかりと「みて」、状況を正しく把握しておくことが不可欠の条件となります。注意すべき対象を見落としたり見誤ったりすれば、的確な予測はできないからです。しっかりと「みる」ためには、脇見運転や慢然運転をしないということはもちろんですが、一時停止が必要な場所では、しっかり止まって、はっきり確認するということが重要なポイントになります。



見えない危険を予測する

危険は常に目に見えているとは限りません。例えば、見通しの悪い交差点では、交差道路側の車や歩行者は見えませんが、見通しの悪いカーブではカーブの先の状況が見えず、対向車や駐車車両等の有無が把握できません。また、対向右折車が大型車の場合などは、その側方を進行してくる対向直進車は見えにくいものです。こうした見えない部分（死角）に潜んでいる危険を予測する必要があります。

相手の特性を理解しておく

例えば、前方を高齢者の乗った自転車が走行していて、その先にT字路があるような場合、「高齢者は身体的な制約により首を回して後方を見るのが難しいため、高齢者の乗った自転車は後方確認しないで進路変更することがある」という特性を知っていれば、「自転車はT字路に入ろうとして、後方の確認をせず右折してくるかもしれない」と予測することができます。そのため、スピードを落とし自転車の動きに注意するなどの危険回避措置をあらかじめ講じることができますが、そうした特性を知らなければ、「後方の確認もせず横断してくることはないだろう」と判断してそのまま進行するでしょう。どちらが事故につながりやすいかはいうまでもありません。このように相手の特性を知ることが、危険予測のための必須条件といえます。



自分の状態もチェックする

的確な危険予測を行うためには、自分自身の状態もチェックしておく必要があります。飲酒運転が許されない行為であることはいうまでもありませんが、疲労した状態での運転も注意力や集中力を低下させ、危険を見落としたり判断を誤らせたりしますから大変危険です。また、イライラしたりカッカした状態も正常な認知や判断を妨げます。したがって、運転中は常に平静さを保ち、心身ともに良好な状態でハンドルを握ることが大切です。



危険は変化する

運転中の危険は常に同じではなく、刻々と変化します。

図1は、自車は交差点に接近し、左折するつもりで進行しています。前方左側の歩道を自転車が通行しています。自車が のときは、自転車が車道に出てこないかどうかには注意する必要がありますが、接近し左折しようとする の位置ではどうでしょうか。この時点では自車は自転車を追い抜いて前方の視界からは消えていると考えられますが、視界から消えているからといって危険も消えてしまったわけではありません。自転車の存在を忘れてそのまま左折すると、横断歩道を進行してきた自転車と衝突する危険があります。このように同じ対象でも、状況の変化に応じて危険の様態も変化するという点に留意する必要があります。

図2は生活道路を走行している場面です。前方左側に歩行者がおり、右側の路地から自転車が道路に出ようとしています。前方には見通しの悪い交差点があり、その先には駐車車両があってその付近に歩行者がいます。自車は交差点を直進するつもりで進行しています。

まず、自車が のときには、前方の歩行者に注意が必要です。また、右側の路地から自転車が出てくようとしていますから、自転車の動きにも注意が必要です。

この位置では、交差道路の状況が確認できませんが、車や自転車などが出てくるかもしれません。見通しの悪い交差点は徐行して進行する必要がありますが、安全を確保するためには、できるだけ一時停止をして、左右の安全確認をするのが望ましいでしょう。なお、徐行や一時停止をする際に、急な減速や停止をすると後続車に追突される危険がありますから、徐々にスピードを落として後続車に減速や停止の意図を早目に伝えることが大切です。

交差点を通過した の位置では、交差点の先の駐車車両付近の歩行者に注意が必要です。特に子どもの場合は駐車車両に隠されて見えにくく発見が遅れがちになります。したがって、駐車車両を通過するまでは徐行して進行するのが安全な方法です。

このように交通状況における危険は次々に変化していきますから、運転中は決して気を抜けません。常に周囲の状況をしっかり見て、起こりうる危険を予測した運転を心がけましょう。

図1

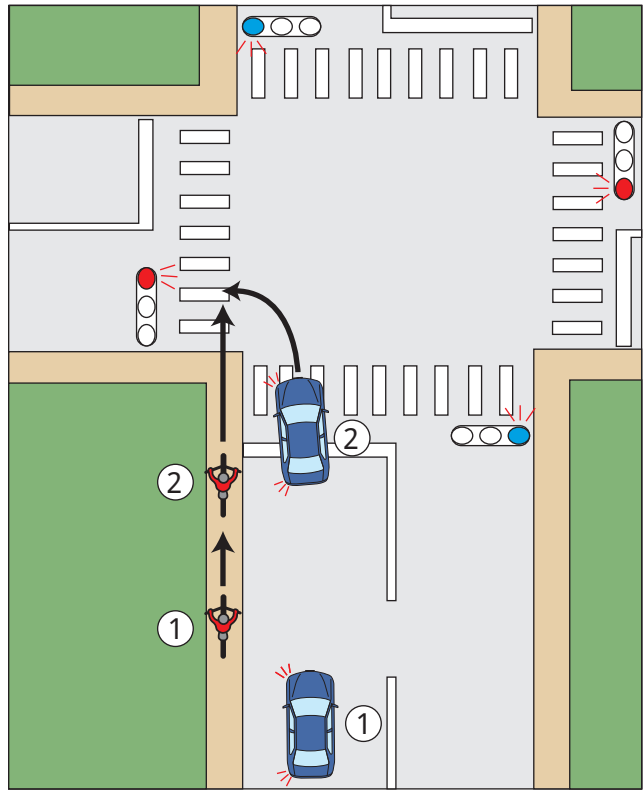
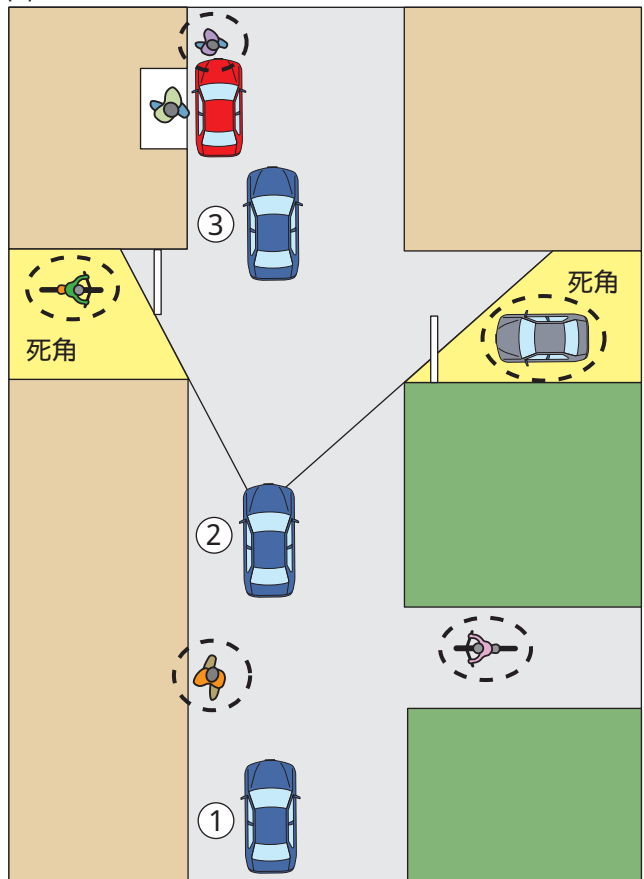


図2



「ご相談・お申込先」